

教師が育たない学校は生徒も育たない

2023・11・15 重枝 一郎

危惧することがある。以前に「働きやすさと働きがい」について書いた（校長研修だより114号「ワーク・エンゲイジメント」）。そこでも暗に伝えたかったことだが、教師は日々の「働きがい」を得にくくなっているのではないかということである。以前から教師は甘い、世間知らずだと言われ、一方で学力低下やいじめ、不登校等々でスクープゴートにされてきた。その上、常に新しい教育課題に追われている。はっきり言って今の教育がよくなったかどうかは実感しにくい。でも、教育者として楽しいかどうかは実感できる。楽しんでいるか！

私自身、その時はそうは思っていなくても、後から楽しい思い出になっていることがほとんどである。その時々で、勉強嫌いの生徒がいて、いじめ問題があり、不登校があり、地域・保護者からの理不尽なことがあり、家庭問題で苦しむ生徒がいて・・・このような事例から自分が得たことは大きく、生きる糧になっている。それはその時々で、どのようにするかを考えたり、仲間と議論したりしたからだと思う。手のかからない生徒ばかりの学校だったらどうだったか（あるわけないが・笑）。与えられた役割や与えられた目標のまま教育するだけでは、「働きがい」はたぶん得られない。

私が若かった頃は、悉皆の研修はたいしてなかった。教授法から教育活動まで個人個人の「やる気」に任されていた。ひたすら実践書を読み漁り、たくさん真似をしてみた。その中で「教師」というものを探り続けていた。

3校目の学校の時、月に1回、特別な土曜日をつくった。午前中は自分の部活、午後は福岡市選抜チームの指導、夜7時ごろから深夜の2時ごろまで、翌月の学年重点目標、特活、総合、道徳の指導案を作成し冊子にしていた（5年間続けた）。どれもSGE（構成的エンカウンター）とSST（ソーシャルスキルトレーニング）を融合させて生徒の内発的動機付けを導くやり方を主としていた。実践後は、その成果となる姿が、様々な場面で役立っていることに、教師は注意を払うだけでよいと同僚に伝えていた。余談だが、私が土曜の深夜に学校にいるという話は地域の保護者に広まった。10時くらいになると保護者からおにぎりやお菓子が届くようになった（笑）。

若い頃は「率先してやる！」をスタイルにしていたが、今は「信頼し、頼る！」を大事にしている。

自分は、これまでの経験の中で、何を見て、何を感じたのだろう。でも一番大切なのはどう生かすかになる。

これまでの経験で一番生かしたいと思うことは、人を育てている感性のことになる。私たちは人を育てている。野菜や花を育てるには水が必要だが、人を育てるにも水っ気が大事だと思う。水っ気とは楽しんでいるかということである。今は、スーパーでは曲がった大根、見栄えの悪い野菜も人気がある。質の時代になっている。要は中身である。人で言えば、非認知能力である。

失敗しないで伸びることに消極的な学校は衰退する。水っ気がなくカラッカラの学校では教師は育たない。

そして教師が育たない学校は、生徒も育たない。